

子どもが「キレル」ということ

— 先行研究とメディアの変遷から —

黒 沼 茉 未

An Action that a Child Causes “Short-Temper”

— From the Precedent Studies and the Transition of Media —

KURONUMA Mami

キーワード：キレル、メディア、学園ドラマ

はじめに

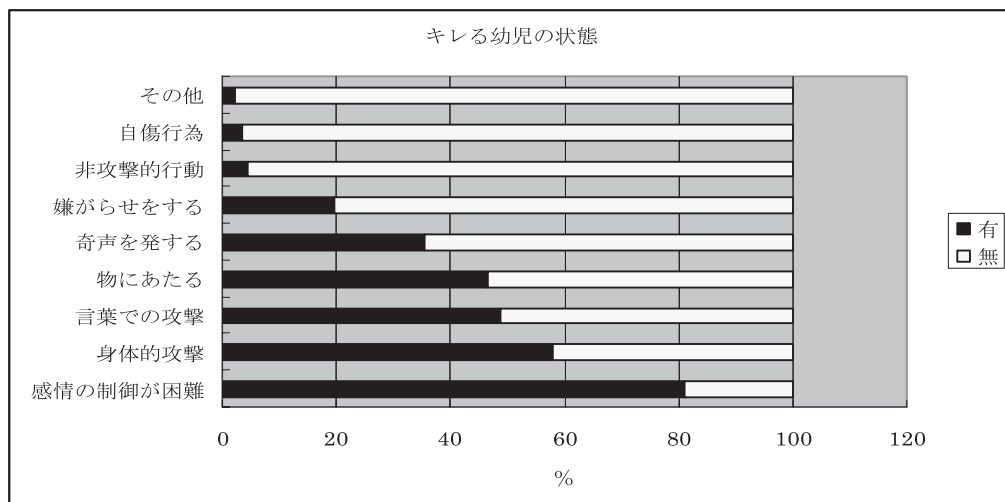
全国の小、中、高校が2008年度に確認した児童生徒の暴力行為は5万9618件と、前年度比の13%増で7千件近く増え、過去最多を更新したという¹⁾。今日では突発的に暴力的になる、キレル子どもが増えているといわれている。これは星信子の研究²⁾から、学童期だけではなく乳幼児期にも当てはまることが示唆されている。星が幼稚園や保育所でキレル子どもの状態を調査したところ、感情の制御が困難な子ども、身体的・言語的・物にあたる、などの攻撃行動、奇声を発するなどの行動が多くみられていた。詳しくは下図1

の通りである。

乳幼児がキレルということについて、神山潤³⁾は遅寝遅起きが感情コントロールの難しい子どもを生みだしているのではないかと述べている。原田真澄と谷本満江⁴⁾は、保育所や幼稚園でも朝から活気がない、イライラしてトラブルを起こしやすいなど、睡眠不足は園児ひとりの問題ではなく周囲へ波紋を広げてしまおうとしている。

星の調査からも、子どもがキレルきっかけはささいなことが多いという指摘がある。生活習慣の乱れは子どものキレやすさを生み出してしまうといえるだろう。しかし今問題視される1つとして、キレそうにない普通の子が突発的にキレてしまう、ということがある。最近の若年者の凶悪犯罪では典型的な優等生、いわゆるよい子が問題を

図1 キレル幼児の状態



起こしたというメディア報道を耳にする。このようなニュースを聞く中で、子どもが何を考えているか分からず怖い、という声を聞いた。キレることが低年齢化されてきているといわれる現在、この「キレる」という漠然とした言葉のなかで、子どもに対する理解が難しくなっている部分もあるのではないかと考えた。乳幼児や学童児が心身健康に育つうえで、社会からの影響を大きくうけていくことになる。そのような中で、子どもが子どもらしくいられるよう発達段階に合わせた成長が必要になってくる。そこに周りの大人が適切に関わっていくには、子どものキレるということはどのようなことなのか、理解していくことが求められてくるだろう。また、社会が子どものキレをどのように理解しているか、現代社会を分かりやすく表しているメディアを使ってキレについての変遷をたどり、明らかにしていく。そこから子どもに対する社会からの見方と、子どもの健康との相互関係を考えていきたい。

1. 目的

キレるという問題が漠然と捉えられている社会のなかで、心身健康な子どもが育つために「キレる」要因や問題点について考えていく。また、現代社会を分かりやすく表しているメディアを使ってキレについての変遷をたどり、社会からの子どもの見方と、子どもの健康との相互関係を検討していく。

2. 研究方法

「キレる」ことについて書かれている、教育・カウンセリング関係の雑誌、学校教育学・小児医学・臨床心理学・脳生理学・社会学の立場からの著作、さらに学園もののドラマなどを題材にしてキレるということがはらむ問題や、時代の変遷による子どものキレ方の違いを検討する。「キレる」というキーワード以外に、ストレスや自己開示など関連すると思われるキーワードでも検索を行っ

た。

3. 結果と考察

(1) キレることを問題視した先行研究

先行研究ではキレることが抱える問題についてすでに1990年代半ばから多く取り上げられていた。石川信一や坂野雄二⁵⁾は、望ましい行動に捉われすぎる子どもは不安障害からうつ病になりやすいという見解を示している。また村田豊久⁶⁾は「自分の心の動きを感じるようになるのは小学校3, 4年頃である」と述べ、この時期に自己意識が芽生え他者との関係の有り様を見直すことを説明している。一方、櫻井聖子や青木紀久代⁷⁾は思春期は自分の内面を大人に知られたくない、という気持ちが強くなることを説明している。これに関連して山口豊一⁸⁾らの研究から、この時期に親から友達へとサポート源が移行していくことを示している。親と距離を置いたり、反抗したりしながら仲間と切磋琢磨しあい過ごしていくことで、学童期・思春期の発達課題が達成されていくということになるだろう。しかし、この段階で反抗することを諦めていたり親の理想に応えようと一心に努力する子どもはどうなるのだろうか。

キレる問題の現状として、富田富士也⁹⁾は傷つくことを恐れ感情を押し殺してきた子どもは、時として想像し難いほどの残忍性を帯びて噴火すると述べている。原田正文¹⁰⁾は大人びすぎていることで友達との関わり方が分からず、自分自身の感情コントロールも出来なくなると論じている。脳生理学者の高田明和¹¹⁾は「前頭前野で本能の抑制機能が働き子どもはその抑制がうまくゆかず感情を爆発させやすい」と述べている。

感情的になりやすい時期に自分を抑えることは大きなエネルギーを使うだろう。そして抑制し続けた結果、一気に感情を爆発させてしまうことにもつながる。宗像恒次は¹²⁾ イイ子心を持続させることで怒りや悲しさを感じ、自己嫌悪に苦しむ、と述べている。我慢しながら「よい子」でい続け、自分をどんどん嫌いになっていく。こうし

たことは、成長途上にある子どもにとって問題をはらんでいるといえる。

小児科医の三好邦雄¹³⁾によれば、心身両面の障害を訴えて受診することが非常に増してきているという。何事にも一生懸命の姿勢や周りへの気遣いで心身のエネルギーを使い、長期の精神緊張によって体調にも大きな影響を及ぼすと思われる。

(2) 先行研究からのキレル要因

1) 親の過度な密着・放任によるもの

大河原美以¹⁴⁾はキレル子どもには「よい子」で育ってきた事例が目立ち、それらには虐待やあきらかな心的外傷体験は認められなかったとしている。大河原によると、原因の根底は親子のコミュニケーション不全であると述べ、子どもがネガティブな感情を身体的・言語的にだけでなく、非言語的にも表出されないことでキレてしまうという。

つまり、表情にも口調にも態度にも出さない子どもたちは周りから本当の気持ちを理解されずにいることになる。その分、我慢しきれなくなったときに何かに憑つかれたような形相で暴力をふるうことになるというのだ。確かに、非言語的にも本来の自分を出さないと周りが危機的状態に気づくことが出来ず、対処することも出来ない。しばしば報道で「よく出来るよい子であったのに」「いつもは大人しいが、急に怒りだした」と言われているのはこのことが関係してくるであろう。まとめて大河原は「コミュニケーションの回復が重要な指標になる」という仮説を提示している。しかし実際コミュニケーションがうまくとれなくてキレない子どももいるであろうし、原因がそれだけではないと思われる。

これに反して三好¹⁵⁾は、問題は親子の密着にあると述べている。子どもが親の傍にすぎると、大人の行動と思考のパターンを学習する一方で、子どもの集団で学習すべき子どもの行動と思考パターンを学習する機会は乏しくなってしまうという。

子どもは子どもの中で育ち、それを見て親も子どもの成長を学ぶこともあるだろう。親が子どもと居すぎてもよくない理由に、子どもが学習できなくなるだけでなく大人自身が子どものあるべき姿を学習できなくなる点にもあると思う。

大河原、三好が異なる見解を表す要因のひとつに、職業上の立場の相違が考えられるのではないだろうか。大河原は臨床心理士であり、カウンセリングを行いながら研究をしている。そのため心理面からの援助が主であり、子どもや母親の気持ちを汲み取ろうとする姿勢からも、感情のあり方やコミュニケーションのとり方に視点がいったのだろう。三好は小児科医であるため、子どもの身体面に着目して原因を探っている。子どもに特徴的な楽しさ中心の行動が欠如していると感じていることや、身体面の問題も把握したり問題行動パターンを疾患分類に当てはめて考えていたりする。こうすることで、子どもの精神面の問題が身体に大きな影響を及ぼすことを示唆するとともに、心理面ではなく親子の生活背景や行動能力などに注意が向き、親子の密着の危うさを述べることにつながったのではないだろうか。

これまでの文献で、親への批判について父親に対するものはほとんどなく母親に関してばかりであった。やはり家庭内で子どもと過ごす時間が長いのは母親であり、その分母親に育児の責任のしかかっていることの表れでもあるだろう。これは後に述べる「母親役割に捉われたよい母」と関係してくると思われる。

2) 大人らしさが欠けた親によるもの

前川あさ美¹⁶⁾は友達のような親子関係があると子どもは本来の気持ちを出せなくなってしまうと述べている。この場合、親が子どもに嫌われたくないという気持ちがあり、コミュニケーションはとるが子どもの問題行動をごまかしてしまい、親も正直な気持ちを出せないというのだ。前川と同様、平井正三¹⁷⁾も未成熟な親に育てられた子どもは、未成熟な形で育てられやすいと述べている。親がもつ複雑な感情は子どもにも伝わるであ

ろうし、自分の問題を改めてもらえる人がいないことは子どもの成長・発達に良い影響を与えるとは言い難いだろう。

親からの影響を問題視している汐見稔幸¹⁸⁾は、少子化から子どもの育つ場の衰退と親による過干渉が子どもに影響し、過剰に適応するよい子が生まれ、孤立して育てる中で母親役割に捉われた「よい母」が生まれる、と述べている。

今の親の世代は、集団教育が盛んで学歴競争と言われた時を過ごしてきた。そして子どもにも同じように成績を上げることや、周りと同じように発達していくことを期待し実現させようとしているのかもしれない。子どもにとって成績を上げることだけでなく、周りと同じようにいることまで期待されることは発達の個人差が大きいなかで苦痛であるように思われる。

また田辺等や清水耕策ら¹⁹⁾によると、親がアルコール依存症であったり嗜好癖がひどかったりする家庭で幼児期から児童期を過ごした場合、感情的・心理社会的に問題が持続することが多くなるという。そしてその後アダルトチルドレンとなるケースが多く、職場や学校への不適応が起こるといふのだ。これは子どもがキレるに至ったというケースではないが、親がもつ感情に影響してきた、という点で問題の根底に共通しているものがあるのではないだろうか。

3) 社会システムによるもの

これまでは「よい子」の要因に親の影響を述べたが、人の影響にとどまらないとする考えのものもある。確かに親のみでなく教師や友人関係の問題、日々のストレスなどから子どもが事件を起こした、というニュースが報道されている。

2000年に出版された本の中で村山士朗²⁰⁾はよい子がキレてしまう原因が見当たらないと論じており、子どもの内面が病むことへの影響が、複合的で誰しもが営んでいる日常生活それ自体にひそんでいるからだとして述べている。私たちの生きている社会そのものが、競争システムへのとらわれによって人間を病的にしているのだという。

点数化された学校で子どもは自分の限界を知ったり、期待に応えられなかったことによる親の態度の微妙な変化に気付いたりするかもしれない。事例では、親から見放されると感じ不安や恐怖を抱く子どもたちもいた。現代の小・中・高校ではよくあることだが、点数稼ぎのために生徒会役員に立候補したりボランティア活動への参加が生まれている。純粋に学校運営の実施、奉仕の心をつかむためという気持ちの前に競争意識があるのだ。これは競争社会に管理されており、子どもの自立心や自発心は妨げられるだろう。

村山の著作の中でフランスの日本研究者モーリス・パンゲの言葉が出てくる。

「子どもは子どもであると同時に大人であること、親が抱いている希望に従順であることが要求される。親自身も自分の本心から出た希望であるのか、世間一般に望ましいとされている常識に従っているだけなのか、本当はわからない」²¹⁾

この言葉は1986年に出版された『自死の日本史』からの言葉である。日本研究者の彼は日本の学歴主義による競争社会に対して、すでに問題意識を持っていたといえるだろう。モーリス・パンゲの言葉で注目すべき点に、親も自分の本心が分からなくなっているということがある。親自身も競争社会システムに捉われ、自分の子どもを社会的に優位となる一定の評価から見て、それが自分の希望ではなくシステム化されてしまっているといふのだ。

教育ママ・お受験という言葉はよく耳にすることで、現在では特別なことではなくなってきた。良い学校へ出たほうが環境も良いとも考えられる。良い大学・会社に入れることは間違っていることではないし、目標をもって努力することは大切なことである。ただそこで親が社会に管理され、親が子どもを管理していくような育て方は子どもに苦痛と無感情を与えてしまうだろう。

4) キレる要因の複雑さ

これまでの文献や事例を通して親の期待の大きさが子どもに予想以上の圧迫感を与えていること

を知り、それに気づいていない親の事例もいくつか見受けられた。親が子どもに気を遣っていたり何かに依存していたりすることもあるので、時には親自身がつも問題を取り除いていかなければいけない。また、子どもに過度に密着したり放任したりすることもキレル要因になるという。

思春期の子どもをもつ親にとって、子どもとうまく関わっていくことは難しいことであるかもしれない。まして競争化した社会に問題がある場合には、問題を造りあげている要因を認識できないままの親子もいるのではないだろうか。

宗像²²⁾の研究で「イイ子」行動特性をもつものは、東京都近郊都市で20歳以上のどの年代も80%以上いるという。人間周りに気を遣い、よりよく見せようとすることは自然なことであると考えられる。だが子どもが無理をしてよい姿でい続けるのと同様、大人でも「よい親」でいようと無理をし続けることは精神的にきついことであるように思う。「よい親」でいなければと努力する、それは子どもがよい子どもになってくれるように努力することでもあろう。しかしそれはこれまでの論者の意見からも、子どもにとって時として大きな負担を及ぼすことになると考えられる。

キレル問題が起こる中、その要因を子どもの性格や親の育て方だけに視点をあてようとするのではなく子どもの友達、親の友達、周囲の大人たちとの関係へと問題意識を広げていく。そこから競争社会に捉われていたことに気づけるかもしれない。それは当事者であるものにとっても、何に影響されていたのかを客観視し問題に向きあえるサポートとなるのではないだろうか。

(3) キレルということ

1) 性差によるキレ方の違い

①本能によるもの

これまでよい子がキレル現象の事例やルポルタージュを見てきたが、少年に対するものがほとんどであった。星の調査でも、キレル幼児の性別について、男児が多いとする園は、幼稚園では76.2%、保育園では79.7%であった。幼稚園と保育園

ともに、男児が多いことがわかる²³⁾。

よい子のキレ方が男女によって違うことを指摘しているものもある。女子のよい子がキレル現象については長谷川博一²⁴⁾が、女子のキレは一般にそのエネルギーを内向して自分にぶつけようとする。これは衝動の『外向』『内向』であり、きわめて生物学的な本能の性差原理に基づいたものといえる、と述べている。つまり性行動における性差のように、男性が積極的・行動的になることが多いというのだ。性行動に関して、女性は男性よりどちらかといえば衝動的でない。キレルという現象にも本能行動のように性差が生まれ、女子の場合はリストカットや自傷・摂食障害など自分に向かっているという。

事例集では確かに、女子の行動は自傷行為や摂食障害が大半を占めていた。その他にはひきこもりや心身の不調がひどくなることも多かった。長谷川がいうように、やはり女子と男子では性差という面でキレルという反動の仕方が違ってくるのだろう。

性差によるキレ方の違いを調べるなか、本音が出せない場合に彼らは自分の頭の中で他者とのコミュニケーションをつくっていたり、攻撃的になったりしながら自己を守り本来の自分を表現しているのではないかと思えた。これらのキレル行動には、どうにかして自分を保っていかうとする子どもの潜在的な強さを感じられた。子どもは子どもらしく生きるため、様々な方法で自分を守りながら過ごしているのかもしれない。

②発達学によるもの

性差による感情表出の違いについて汐見²⁵⁾は長谷川とは違った見解を示している。女の子が女になるより男の子が男になるほうが難しいとし、人間の本能ではなく成長段階から男性の攻撃性は出てくるとしている。

成長段階とは発達の過程のことである。ほとんどの子どもは母親と過ごす時間が多いだろう。自己の中に母を求めながら発達していき信頼関係を育んでいくのだ。女の子は同じ性である母親を同

一化の対象として育つが、男の子は次第に男的に育つため、身近な母親から移行していかなければならない。この時に母親への反発が生じ、これを機に徐々に男らしさや攻撃的なものが生まれてくるというのだ。

汐見は親子学など育児についても精通している研究者であるため、人間の本能よりも育ってきた過程に注目したことによる見解であろう。長谷川は臨床心理士であり、スクールカウンセラーでもある。子どものもつ心理面に深く着目しながら人間の心の深層面に着眼点をもっているため、本能行動としての性差を捉えたのではないだろうか。

2) アニメから見るキレ方

①望ましいキレ方

長谷川²⁶⁾は『クレヨンしんちゃん』のアニメを例にあげて、大人のキレへの対処方法を説明している。このアニメに出てくるネネちゃんのママは、うさぎのぬいぐるみに暴力を振るってストレスを発散している。キレていたら攻撃に待ったをかけられず対象の選別が出来ないため、これはキレているのではなく自己統制しているのだという。そして汐見²⁷⁾は主人公であるしんちゃんの母親、ミサエの子育てを推奨している。ミサエは同じことでも何度もしんちゃんを叱り、そこからしんちゃんも怒られるだろうことを分かっている。だからしんちゃんは母親に対していたづらを繰り返せたり、自分の感情を素直に出せたりしているのだそうだ。実際に漫画を読んでも、ミサエが怒りそうなときにしんちゃんは逃げ出すなど、ミサエの怒りを理解しているようだった。

アニメのなかにも、幼児期の発育を考えること、自分の子育てに余裕をもって取り組むことを教えてくれること、など大切なことが描かれているといえるだろう。

②望ましくないキレ方

逆に影山任佐²⁸⁾は『ドラえもん』を挙げてのび太の危うさを説いている。ドラえもんの道具を借りて、友達に誇示する場面はナイフをもって周

りを制し、自分の存在を確かめる子どもに通じるものがあると述べている。この要因に影山は、のび太の母は叱責の言葉ばかり言い、それを和らげてくれる大人の存在が出てこないことを説明している。漫画を読むと先生にも親にも友達にもばかりにされ、ドラえもんにも助けを求めている描写が多い。これは先に述べた、親の学歴主義の子どもへの悪影響と重なる部分があるのかもしれない。

親となるものにとって、論文や著作には重要なことが述べられているが、これらを読む機会は一般的に少ないと考えられる。今回アニメや漫画で親のあり方が論じられているものを観てみると、視覚的にも分かりやすく自分の行動を客観視しやすいと思われた。子どもがキレる問題は周りの大人や親が、その事実をよく知ることが不可欠である。メディアはそのことを気づかせてくれるものでもあるだろう。

(4) 社会からみた子どもがキレるということ

飯田譲治²⁹⁾はドラマと少年犯罪が起きた関係について述べている。子どもにとってドラマから影響されることもあれば、現在の子どものあり方を的確に捉えているドラマもあるのだろう。今回は時代の変遷とキレる問題の変遷を端的に示しているドラマとして、『3年B組 金八先生』を主な題材にして考えてみた。

1) 時代の流れによるキレる子どもの描写変化

金八先生は1979年の10月にスタートし、現在2007年10月に放送されている時点で第8回目となっている。約30年もの時を刻んでいるので、教師の変化だけでなく、生徒の格好や放映される話題も変わってきている。その中でキレる問題について題材となっているものもいくつかある。その点に注目して初回シリーズから見えていったところ、キレる問題はごく最近のものから始まっている。普通の子がキレる描写は初回では全く出てきていないのだ。そこで、年代ごとの子どものキレる様子について分類していくことにした。

①初回から1990年代前半放送シリーズにかけての生徒の描写

1979年の初回シリーズから1980年代にかけても、暴動を起こす少年は出てきている。初回は家出事件やリンチ事件などが起こり、2回目は生徒が非行行為を繰り返している。3回目、4回目では体の大切さやいじめ問題などを取り上げている。ここまでで攻撃性をもっている少年に特徴的なのは、服装や行動が目立っているということである。生徒は夜遊びなどの非行行動を繰り返している。格好も頭はリーゼントやパンチパーマであり、学ランの下に派手なシャツを着ていかにもつっぱりという感じである。彼らは集団になって行動し一目置かれた存在であった。

普通の子がキレル描写はないが、暴動を起こす子どもはいる。彼らは段階を踏んで非行を悪化さ

せていっていた。授業をさぼることから始まり家出や暴力へと進んでいってしまうのだ。また、彼らには攻撃する理由がはっきりとしていた。そのため攻撃する相手も学校や教師へと向き、それにより教師側も生徒が何を求めているか何が原因なのかある程度把握できることにつながったのではないだろうか。つまり誰にでも、やはりと思わせるような子どもたちがキレル行動を起こしていったのだ。

この1980年代後半から1990年代前半にかけては以下の図2の青少年白書³⁰⁾からも分かるように、非行件数が突出し、検挙人員が大幅に増えたときであった。社会的にも、男子のボンタンズボンや女子のスケバンスタイルが全国で流行った当時である。その頃の社会背景がドラマにもよく表れているといえるだろう。

図2 刑法少年等の検挙人員、人口比の推移

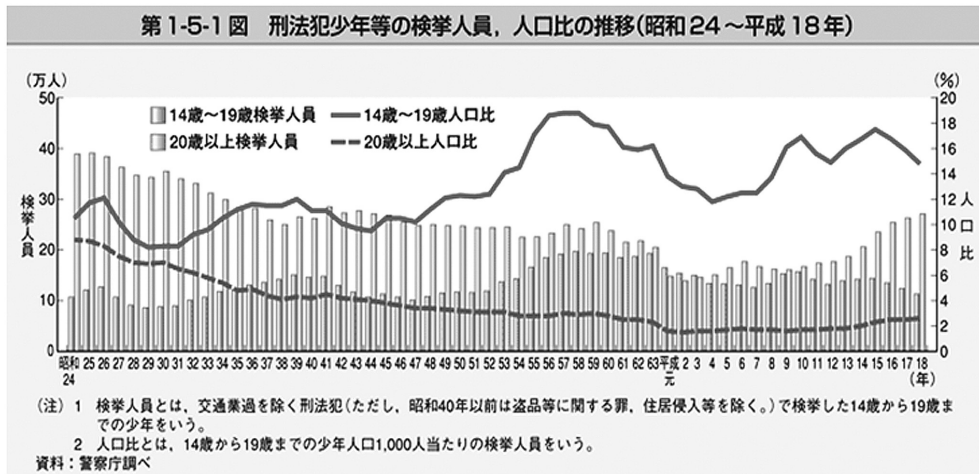


表1 『3年B組 金八先生』主題(1979年～1980年代)

第1回シリーズ	・内申書 ・受験戦争に消えた命 (1979年10月～1980年3月放送)
第2回シリーズ	・心を病む子どもたち ・親と子進路で対決 (1980年10月～1981年3月放送)
第3回シリーズ	・ブツンママ (1988年10月～12月まで放送)
第4回シリーズ	・ボク何になるの? ・オ受験母子の対決 (1995年10月～1996年3月放送)

上記の表1はキレル問題に直接関係しているわけではないが、子どもが成績や受験に悩み苦しんでいる回の題名である。この時点で急にキレルことは描かれていない。ただ当時から人間関係や受験から、心身を病む子どもは描かれている。特に1980年に放送された第2回シリーズでは受験

戦争の深刻さが描かれており、先に述べた学歴主義時代を過ごしてきた親世代に通ずるものであろう。実際、この頃中学生だった生徒は今現在ちょうど40歳くらいである。親として子どもを育てている人も多いだろうなか、当時の金八先生からはその頃の子どもの、心の余裕のなさが伝わ

表2 『3年B組 金八先生』主題（1990年後半～2008年）

第5回シリーズ	・3B学級崩壊寸前 ・不登校第1号！ ・アノ事件の主役が… ・ガラスの少年①～④ (1999年10月～2000年3月放送)	・問題続出大混乱！！ ・迷える子羊たち ・金八涙の体罰 3B 騒然辞表提出 ・自分を探す旅
第6回シリーズ	・父さんアンタが嫌い ・子に捨てられた親 (2001年10月～2002年3月放送)	・見捨てられた子
第7回シリーズ	・史上最低の3B！ (2004年10月～2005年3月放送)	
第8回シリーズ	・ギラリと光るダイヤのような日！ ・親の希望子どもの夢 (2007年10月～2008年3月放送)	

ってきた。今子どもに無意識にでも無理を強いている親は学歴主義の一番の犠牲者でもあり今もそこから逃れられないのかもしれない。

② 1990年代後半から2008年放送シリーズにかけての生徒の描写

第6回は性同一性障害、第7回はドラッグについての話題を深めているが、第5回そして現在放送されている第8回ではキレル子どもについて詳しく放送されていた。次の表はキレル問題と関連があると思われる、親や先生の前で無理をしている子どもの場面があった回の題名である。

第5回のシリーズの中で一番問題を起こす少年は先生の前では勉強も出来、性格も良い優等生を演じている。しかし裏で仲間をしきり教師にけがをさせるなどの行為をしている。この少年の母親は過剰に子どもに気をつかっており心が病んでいる設定であった。金八先生はこの少年の悪事に気づいていたが、仮面をかぶった少年を見てきた他の教師はなぜあの子が、と唾然とするのである。

これは明らかに今までの少年のキレ方とは違ふし、子どもの設定も変わってきている。先に述べたように、昔は問題を起こす生徒はやはりと思わせる、小さな非行問題を頻繁に起こしている生徒であった。しかし現在では問題を起こしそうにない生徒が問題を起こす設定となっている。彼らの格好は目立つどころかきちんとしている。そして他にも特徴的なこととして前半シリーズでは、問題行動は徐々にエスカレートしていたが後半シリーズでは行動が突発的なのである。

歴史学者・国際政治学者の斉藤孝³¹⁾はキレルという言葉は90年代後半からマスメディアに類出したように思える、と述べている。後半シリーズで急に叫んだり暴れたりする生徒の描写が出てくるようになったが、彼らは暴動を起こした後に呆然とするのだ。ずっと怒っている生徒が描かれていた前半シリーズとは違い、自分でもどうしていいか分からなくなったような描かれ方である。このときの子どもは、手加減することや相手を判断して攻撃するなどの心のゆとりはないだろう。この衝動性は時に人を殺めてしまうことにもつながると思う。

また1990年代後半は学級崩壊という言葉が出てきた頃である。先にも挙げた青少年白書の図を見ると、1996年を境にして子どもが起こす暴力事件の件数は増えてきている。神戸の児童連続殺傷事件から始まり2000年に入っても、「人殺しをしたかった」という体験殺人やバスジャック事件、野球部員による撲殺事件など少年たちによる凶悪事件が続いた。金八先生に描かれている生徒のように、「よい子」が問題を起こし始めた頃はすでに、社会では大きな問題事として取り扱われてきたことになる。2003年に少年犯罪がピークを迎えているが、これは1980年代に迎えた少年犯罪のピークのときとは子どもの様子や事件のあり方が大きく違っていることがいえるだろう。

2) 普通の子がキレルドラマの出現

『3年B組 金八先生』以外のテレビで放映された学園ドラマでは、1994年に『人間・失格～

たとえば『ぼくが死んだら』では優等生たちの悲惨な競い合いを描いている。2005年の『ドラゴン桜』では脇役であるが、成績優秀者が陰で悪いことをしていた。そして2007年によい生徒と見られてきた子どもが陰で生徒をしきり暴行を加えていた『生徒諸君』、同じ年に優等生である男子生徒が主人公に暴行し脅す、『ライフ』が放送されている。

このようにキレル問題を取り上げている学園ドラマを調べられる限り検証してみたところ、1990年代後半から数多く扱われてきていた。キレル問題が最近のドラマにもいくつも出ていることは、やはり現在の子どものキレル行動変化を問題視し子どもたちの一つの特徴として表れ始めていると言っていいたいだろう。

3) ドラマに見られるキレル子どもの特徴

① 家庭環境

学園ドラマに描かれるキレル子ども像に視点を向けて見ると、家庭環境は似たようなものが多かった。例えば、家は造りもよく清潔に整えられている。父親は大抵エリート育ちで仕事優先であり、家庭での存在感は薄い。しかし絶対的な権力を持っており威張っている。母親は主婦として、父親の気を遣いながら子どもを熱心に育てていることが多い。そして子どもに期待しすぎていたり、子どもの言うことを聞きすぎていたりするのである。

これは大河原が言う「子どもが本当の意味でよい子に育つことを願っているのではなく、他者から見て親から見てよい子であることを願っている」³²⁾ ことになるだろう。

② キレル子の存在

キレル子はクラスでの人気者、という設定は少ない。真面目で成績がよく聞き分けのよい子は目立たなかったり、むしろクラスメイトから敬遠されがちである。これは永山彦三郎³³⁾ が述べる、「よい子」は現代ではなかなか存在を認められももらえなくなったということに合致するように思

える。懸命に目指してきた「よい子」が若者の間では承認されなくなり、それが「よい子」を圧迫し犯罪に拍車をかけているとも述べている。無理をしてでも頑張る子どもたち、彼らが仲間から疎まれたとき、自分をありのままに出せる場所はどこにもなくなってしまうだろう。

4) 先行研究とドラマとの違い

① 共通点

先行研究とドラマを比較してみると、先行研究でも学園ドラマでも、キレル問題が取り上げられるようになったのは1990年代半ばからである。この頃は先ほど述べたように、「キレル」や「学級崩壊」という言葉が出始め、少年による暴力件数が増えたときであった。学校教育者や臨床心理士、社会学者などの専門家だけではなく、小説家や脚本家もこの問題の深刻さを感じ始めたと言えるだろう。

② 相違点

先行研究との違いの1つ目として、ドラマで女子はキレルことのない素直な優等生的よい子であった。男子生徒が突発的にキレてしまうことは、(3)の1)で述べた長谷川や汐見の意見のように説明がつかない。しかし女子生徒は本当のよい子として描かれている。成績も優秀で家柄も良い、そして優しく先生からの信望も厚い女子生徒は学級委員や周りの問題を解決しようと行動する役として描かれている。つまり女子生徒のキレル描写はほとんど出てこない。

長谷川は本能行動からの性差によるキレルの違いを述べていたが、キレルの対処策を内へ内へとけていく子どもは女子に限らず男子にもいるであろう。2004年に女子児童が友達を刺殺した事件もあったように、女子が他人へ攻撃性を向けることも十分考えられる。性差によってキレル方を区別することは出来ないだろう。

2つ目として、ドラマでは素直でキレルよい子が親と友達のような関係である場合もあった。また、先行研究では親のあり方が多く述べられて

いたが「よい子」がキレることについて子どもにのみ視点があてられており、その要因がきちんと示されていない。このようなドラマの表現から、子どもが何を考えているのか分からない、恐ろしいという風に見がちになってしまうことも考えられるだろう。

5) メディアにおけるキレる描写の問題

金八先生を中心にキレる問題を見ていくと年代によって子どもの描写の違いが端的に表現されており、それは他のドラマにもいえることであった。先行研究と学園ドラマを見比べてみても取り上げている問題の時期が近かったが、学園ドラマは現代に起きている問題を取り上げそれを広く訴えかけてくれるものになるといえるだろう。実際に青少年白書から、1990年代後半を境にして子どもが起こす暴力事件の件数は増えてきていて、1980年代の少年犯罪ピーク時とはキレる質が変わってきていることは確かであると思われる。そのような状況に危機意識をもち、先行研究やメディアなどは子どものキレる問題を数多くとりあげたのだと思う。

だが先行研究とドラマでは異なった点もいくつかあり、ドラマだけ見たとするとそこからドラマによるキレる子ども像が造りあげられてしまうことも考えられる。メディアなどで昔と今の子どもは変わったということが強調されすぎて、「理解できない子ども像」が一人歩きしてしまっただけでは問題解決には至らない。子どもの本質そのものが変わったのではなく、子どもがキレる要因とも絡んでくる、社会情勢、家庭環境、人間関係など子どもを取り巻くすべてが子どものキレと関係してきていることを意識しないといけないのではないだろうか。子どものキレの実態を通してメディアが、昔と違う子ども像だけを強く表現することで社会からの子どもの見方が偏ってしまっただけではないだろう。子ども一人一人をきちんと見ていながら、複数領域の専門家による先行研究や、社会問題が描かれたドラマなどからキレを理解し、キレる問題の解決策や捉え方を考えていくことが

求められている。

おわりに

キレるということに関しての論文や著作を読んだりドラマを観たりしていくなか、子どもに影響を与えるものは数多くあることが分かった。他者に反抗したり親から離れたりしていきながら、そこに生じる不安から友達に依存しグループを作っていく。しかし子どもにとって親は大きな存在であることは確かである。放任することなく過保護になることなく、富田³⁴⁾が言うように子どもが安心し、よりどころとなる人が必要なのだと思う。そこで傷つくリスクを負うことができ、生身の人間関係を構築していくことにつながるのだろう。

場合によっては、無理をするよい子でいることでクラスの中での自分の存在感を確かめ安心感を得られることになるかもしれない。そう考えるとよい子でいることで自己防衛し適応しているともいえる。春日耕夫³⁵⁾は、励まさないで受け入れることは苦悩や悲しみから解放してくれる、と述べている。ありのままの子どもを受け入れる、これは一見簡単なようにみえるが、現代では大人が子どもの理想像を造ってしまい、大人と子ども両方がそれに囚われてしまうという意識の構図が支配するようになってきて、とても難しいことになっているのかもしれない。

今回大きく取り上げた『3年B組 金八先生』に関して、諏訪哲二³⁶⁾は「学校に金八先生はいらない」と断言している。金八先生は生徒を他者と見ず自分の考えを生徒に説き、自分の理想通りになってくれることを生徒に期待しているというのだ。諏訪は約40年間の教師経験から金八の一言に疑問を抱き否定している。金八が正しいと考えていることは、時に強すぎるというのだ。金八先生が自分の理想を子どもに求めているのなら、先に述べた期待しすぎる親と共通するところがある。

金八先生はドラマの中の登場人物であるが、一

般的にも良い教師と捉えられているだろう。金八先生をよい先生と受け止めない人は少ないと思われる。このことは、よい子であるようにと求めることが、私たちの中で当たり前になりすぎて簡単に気づかないということを表しているのではないだろうか。いつの間にか子どもに理想の形を求めていることがないか、自分自身を客観視する眼も必要だといえるだろう。

キレル要因を検討していくなかでは、親子関係について述べているものが多数あった。問題行動を防ぐためには、自己を抑える力の形成を含めた対応をしていかなければならない。そこに必要になってくるのは、対人関係能力や社会適応能力などである。この育成のためには適切な愛着形成が重要である。嶋崎政男³⁷⁾は情動の健全な発達のためには乳幼児教育が重要であると述べている。言い換えると、幼い時期の親の不適切な養育は不信感、自己中心性、抑制力不足等を形成してしまうという。乳幼児期には親から無条件の愛情をもらって、人間や社会に対する信頼と、自分が他人と社会に受け入れられているという安心や自信を得ることになるのではないだろうか。孤独や疎外感は、ときに人を追い詰め攻撃へと向かわせる。自己を評価し、受け入れてくれる人がいる居場所、つまり自己を価値づける集団をもつことは、心身の健康に不可欠である。

信頼や愛着には母親の存在が大きいだが、実母がいなくても他人が母親的役割をすることはできるだろう。自分が愛されていることで自分の価値を知り、自分を愛していくことができる。そこから自分を傷つけたり、衝動的になることを抑える力につながっていくと考える。

引用文献

- 1) 文部科学省公表資料「平成20年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査（暴力行為、いじめ等）について」文部科学省児童生徒課、2009年
- 2) 星信子・請川滋大「幼稚園・保育所における『キレル』 幼児の現状」『浅井学園大学短期大学部研究紀要』44号、浅井学園大学短期大学、2006年、pp.133-141
- 3) 神山潤「生活リズムと眠りの悩み」『子どもと発育発達』7巻3号、日本発育発達学会、2009年、pp.165-170
- 4) 原田眞澄・谷本満江「5、6歳児の睡眠に関する研究：睡眠リズムと就寝時に焦点をあてて」『中国学園紀要』5号、中国学園大学、2006年、pp.131-135
- 5) 石川信一・坂野雄二「児童における不安症状と行動的特徴の関連」『カウンセリング研究』38巻1号、日本カウンセリング学会、2005年、pp.1-11
- 6) 村田豊久「自分についての感覚・認識」『教育と医学』46巻4号、教育と医学の会、1994年、pp.40-45
- 7) 櫻井聖子・青木紀久代「中学生のメンタルヘルスと心理的サポート源としての保健室」『学校保健研究』47巻、日本学校保健学会、2005年、pp.50-61
- 8) 山口豊一・水野治久・石隈利紀「中学生の悩みの経験・深刻度と被援助志向性の関連」『カウンセリング研究』37巻3号、日本カウンセリング学会、2004年、pp.241-249
- 9) 富田富士也「よい子の悲劇」河出書房新社、2004年、pp.14-20
- 10) 原田正文「小学生の心がわかる本 健康双書」農山漁村文化協会、2001年、p.32
- 11) 高田明和「脳生理からみた心の教育」『教育と医学』46巻4号、教育と医学の会、1994年、pp.330-336
- 12) 宗像恒次「ストレスで『キレル』るイイ子の心の教育」『教育と医学』46巻4号、教育と医学の会、1994年、pp.314-320
- 13) 三好邦雄「失速するよい子たち」角川書店、2001年、pp.42-60
- 14) 大河原美以「怒りをコントロールできない子の理解と援助」金子書房、2004年、p.16
- 15) 前掲「いわゆる『よい子』の示す心身の障害

- とその背景」pp.1241-1243
- 16) 前川あさ美「ちょっと気になる子どもたち」『思春期学』23巻1号、日本思春期学会、2005年、pp.193-197
- 17) 平井正三「未成熟な親に育てられた子」『児童心理』金子書房、2002年、pp.1503-1510
- 18) 汐見稔幸「親子ストレス」平凡社、2005年、p.78
- 19) 田辺等・清水耕策・河原シゲ・竹岡由比・大場千佳・遠藤雅之「精神保健相談におけるアダルトチルドレン問題」『北海道立精神保健福祉センター年報』32巻、北海道立精神保健福祉センター、2001年、pp.84-93
- 20) 村山士朗「なぜ『よい子』が暴発するか」大月書店、2000年、pp.73-74
- 21) モーリス・バンゲ「自死の日本史」筑摩書房、1986年、pp.33-45
- 22) 宗像恒次「人間にとっての性」東山書房、2000年、pp.8-11
- 23) 前掲「幼稚園・保育所における『キレル』幼児の現状」pp.133 - 141
- 24) 長谷川博一「子どもたちの『かすれた声』」日本評論社、1998年、p.32
- 25) 前掲「親子ストレス」p.16
- 26) 前掲「子どもたちの『かすれた声』」pp.148-152
- 27) 汐見稔幸「子育てにとっても大切な27のヒント」双葉社、2006年、p.45
- 28) 影山任佐「普通の子がキレル瞬間」ごま書房、1998年、pp.24-29
- 29) 飯田譲治「TVドラマ“ギフト”の問題」岩波書店、1998年、pp.6-9
- 30) 「主要刑法犯少年の検挙人員及び人口比の推移」総務庁青少年対策本部編『青少年白書』2007年、p.38
- 31) 斉藤孝「子どもたちはなぜキレルのか」筑摩書房、1999年、p.25
- 32) 大河原美以「臨床心理の立場から」『心の科学』102巻3号、放送大学教育振興会、2002年、pp.40-46
- 33) 永山彦三郎「サーフィン型学校が子どもを救う！」平凡社、2001年、p.127
- 34) 前掲「『よい子』の悲劇」p.56
- 35) 春日耕夫「『よい子』という病」岩波書店、1997年、p.45
- 36) 諏訪哲二「学校に金八先生はいらない」洋泉社、1998年、p.44
- 37) 嶋崎政男「少年殺人事件 その原因と今後の対応」学事出版、2006年、p.78

参考文献

- 1) 青木和雄「HELP! キレル子どもたちの心の叫び」金の星社、2000年
- 2) 飽田典子「学校はありのままにいられるところ」『児童心理』2巻、2005年、pp.85-89
- 3) 影山任佐「自己を失った少年たち」講談社、2001年
- 4) 河合隼雄「いのちの対話」潮出版、2002年
- 5) 諏訪哲二「オレ様化する子どもたち」中央公論新社、2005年
- 6) 森崇「キレルということ」『思春期学』22巻1号、日本思春期学会、2004年、pp.53-54
- 7) 森田勇「自分の感情を表に出せる子を育てる」『児童心理』2003年、pp.57-68

(東萌保育専門学校専任教員 黒沼茉未)